

公孫樹

豊島与志雄

「この頃の洋式の建築は可笑しなことをするもんだね。砂利を煮て何にするんだろう。」

そう云つて、吉住が煙草に火をつけながら立止つたので、私も一緒に立つて、やはり煙草に火をつけた。

「まさか砂利だけを煮るつもりでもなからう。」

だが、実際砂利だけを煮てるのだった。長方形の大きな鉄の釜が二つ並んでいて、一方には真黒なアスファルトが、一方のには大粒の砂利が、何れも七分目ばかりはいつていて、下から薪が盛んに焚かれている。アスファルトはもくもくと煮立ってるままであるが、砂利の方には一人の男がついていて、シャベルの先で

しきりにかき廻している。やがて、高い建築の上から斜めに下されてる足場を伝って、両端に石油缶の桶を天秤棒で荷った男達が、幾人も下りてきて、或者はアスファルトを、或者は砂利を、煮え立ったまま石油缶の桶一杯すくい取って、城砦のような高い建築の中に、運び上げてゆく。釜が空になると、またアスファルトや砂利が盛られ、その煮え立ったのが、石油缶の桶で運び去らるる。いつまで見ても同じことだ。

「おい、行こうよ。」と私は促した。

「まあ待て、面白いじゃないか。」

吉住はさも感心したように、アスファルトと砂利と

の釜を見比べていて、動き出そうともしなかった。

砂利から立つ湯気と、アスファルトの濛気と、釜の下から出て来る火気とに、私は少し辟易して、四五歩しざりながら、あたりを振返ってみた。沈みかけた四月末の太陽が、淡い光を投げてる中に、大講堂の廃墟の壁がくつきりと聳えていて、その前に公孫樹の新緑が萌え出していた。十二年の大地震の折、大講堂と法文科の建物との猛火に挟まれながら、不思議に生き残って、春が来ればやはり可愛い小さな葉を出して公孫樹だった。それが大講堂の焼け残りの壁を背景に、四五本ずらりと並んでいた。

「ねえ君、」と私は吉住を呼びかけた、「砂利の煮えてるのなんかより、この木を見てみ給い。この方がよっぽど面白いじゃないか。両方から火に挟まれても、不思議に命が助かって、あんなに芽を出してるところは……廃墟を背にして芽を出してるところは、一寸いいじゃないか。」

吉住はくるりと向き返った。

「ああ、公孫樹か。」そして一寸間を置いた。「そいつあ火に強いんだ。」

「いくら強いつたつて……。」

「そして不思議な木なんだ。」

「不思議な木だつて、公孫樹が。」

「不思議だというのは……。」

「何だい。」

「いや、僕だけにかも知れないが……兎に角変な木だよ。」

私達はもう歩き出していた。そして、吉住は最後の言葉を投げ出すように云い捨てて、憂鬱そうに黙り込んでしまった。

彼が憂鬱になると、一つの癖がある。下唇の端を犬歯で軽く噛んで、眼をしょぼしょぼとさせるのである。でその時——というのをくわしく云えば、朝から暮を

困んでいい加減疲れて、夕飯でも食おうとて出かけて、帝大の裏門から正門へぬける途中、砂利の煮られるのから、次に公孫樹のことになって、彼が急に憂鬱な態度を取ってしまったため、私まで変に気が挫けて、彼のしよぼしよぼした眼から何かを読み取ったり、犬歯で軽く押えられてる唇をほどこしたりする、そんな努力が大儀になって、黙って彼と肩を並べて歩いた。

初め私達は、大学をつきぬけたら正門前から電車に乗って、日本橋の方へ行くつもりだったが、それも面倒くさくなって、どちらから云い出すともなく、正門近くのレストーランで、簡単に飯を食うことにした。

所が、そのレストーランの二階に腰を落付けると、自然と眼の向く表通りに、やはり公孫樹の街路樹が植っていて、小さな可愛い葉の萌え出しているのが、硝子戸越しに見えていた。まだ時間が早くて、電気の来ない室内がぼうつとしてるだけに、外の明るみが際立って、公孫樹の梢がすぐ眼先にまざまざと浮出してきた。

「公孫樹は不思議な木だって、どうしてだい。」

そんな風に私は問いかけざるを得なかったのである。すると、吉住はなお憂鬱な顔付になったが、やがて料理を食ったり酒を飲んだりしてらうちに、変に眼をぎ

らぎら光らしてきて、向うから進んで、次のようなことを話しました。

僕の家 of 庭の隅に、大きな……というほどでもないが、可なりな公孫樹が一本ある。あんな往来にあるのなんかより、もっと美しい瑞々みずみずしい若葉を出してるし、秋には真黄色になって、庭一杯落葉が散り敷く。いくら枝を刈り込んでも、すすくと威勢よく伸び上つてゆく。いつ頃誰が植えたものか分らないが、小さい時にその落葉を拾って遊んだという記憶はないし、その代り、末の妹なんかがそうして遊んでた記憶はあるの

で、多分僕の生れる頃に小さいのが植えられたのだらう。いや、僕が生れるより一二年前に植えられたのに違いない。なぜなら……。

だが、それは先の話だ。公孫樹というものは早く大きくなるものだね。もう立派な大木になっている。

その庭の隅の公孫樹を、父は大変大事にしていた。なぜだか僕には初め分らなかった。今でもよくは分っていないが……。

父には妙な癖があつた。足の蹠の胼^{たこ}を丹念に鋏で切り取るのだ。月に一二回は必ず切り取らなければ承知しなかつた。胼^{たこ}といつても、踵やなんかに来る

のではなくて、小指の根本の蹠に、五十錢銀貨くらい
の大きさに、まんまるく出来るのだった。切り取つて
もすぐに固くなる、固くなると歩くのに痛い、痛いよ
りも気持が悪い、それで月に一二回は鋏で切つてとる
のだった。

大抵日曜日やなんか、比較的朝遅く起き上る日、飯
を食つて新聞などを見てしまうと、それから、朝日の
さしてる座敷の縁側で、ゆつくりと足の胼胝を切りに
かかった。裁縫に使う握鋏で、少しずつ固い皮を切り
取つて、柔かくすべすべになるまでは、いつまでも気
長にやっていた。

厳めしい長い口髭や荒い髪の毛などが、朝日の光を受けて赤茶けて見えていて、大きな額の下に、太い眉根をきつと寄せ、片足を投げ出して身体を変な風にくねらせ、真面目に一心に足の皮を切っている、その姿を見ると、僕は滑稽な気がしたり悲惨な気がしたりした。そういう父は、いつも平素より年が老けて見えた。

時によると、父は縁側に長く寝転んで、母や女中達に胼胝を切らせることもあった。そんな時は殊に気むずかしかつた。手の指先で触ってみて、柔かくすべすべと平らになるまでは、どうしても承知しなかつた。「自分で切つても平らにゆく。お前達に出来ないわけ

はない。」

そう云つて、氣に入るようにならなければ許さなかつた。そして両足とも済んでしまふと、立上つて一つ大きく伸びをして、愉快そうに云つた。「ああ、これできつぱりした。」

父にとつては、蹠の胼胝を切り取ることは、髪を刈つたり入浴したりすることなんかよりも、もつと精神を爽快になすかのようにだつた。

それにまた、切り取る皮は散らさないで、下に敷いた新聞紙の中にまとめなければならぬので、それが切る者には一苦勞だつた。固いこちこちの皮を握鋏で

切るのだから、どうしても遠くへ飛び易かった。然し皮の一片でも遠くに飛び散ると、それを必ず拾わせられた。

「たとい足の皮でも、やはり身体の一部だ、土足に踏み蹂られるところに打捨るのは不快だ。」

それが父の理屈だった。然しそれ以上にもっと本当の理由があつたらしい。

父はどこからか、植物には人体が最上の肥料である、変なことを聞いていたものと見える。戦争後の満洲の野がどうか、昔火葬場だった跡の野原がどうか、そんなことを話してきかしたことがある。そ

のためだかどうだか分らないが、足の胼胝の皮は必ず
まとめて、庭の隅の大事な公孫樹の根本に埋めること
になっていた。

公孫樹は隣家の軒に近いため、半日しか日が当らな
かったが、非常な勢で伸び上って、毎年枝を切り落さ
なければならなかった。勿論、父が足の皮を公孫樹の
根本に埋める癖は、いつ頃から初ったのか僕は覚えて
いない。然し父が公孫樹の根本に立って、すくすくと
した幹を見上げながら、快心の笑みを洩してる姿は、
今でもはつきり眼の中に残っている。

「俺の足の皮の養物を吸って、この伸び上った勢を見

てごらん。」

そう云つて父はよく高らかに笑つた。

けれど実際、足の皮つてそれはいくらの量でもなかつた。五十銭銀貨大の胼胝を薄く切り取つたものだから、円めても小指の先ほどしかなかつた。月に一二次として一年分まとめても、ごく僅かな量にすぎなかつた。

「あんな少しばかりのもので……。」と云つて母は嗤つた。

然し父は、人体の肥料価を主張して止まなかつた。そして他に何の肥料もやらなかつた。

「だけど、あなた、」と母は別な方面から父を揶揄した、
「そんなに公孫樹を大きくしてどうなさるの。銀杏ぎんなんが
なるまでにはなかなかでしょうし、それに、もし引越
しでもするようになったら……。」

「その時は持つてゆくさ。俺が植えた木だから構やし
ない。……銀杏なんかどうだっていいんだ。兎に角、
ああ威勢よく伸び上つてるところは愉快じゃないか。」
と父は答えた。

その公孫樹が果して雌公孫樹かどうかは、父にも
分つてはいなかったらしい。然し父の云う通り、年毎
にずんずん大きくなってゆくのは、見ても気持がよ

かった。移転する折には持つてゆくなどということとは、とても出来そうにないくらい大きくなっていた。そして後には父も、持つてゆくとは云わないで、やがてはこの借家を買ひ取るつもりだと云い出した。それには母も賛成だった。可なり古い家ではあったが、普請も間取りも相当によかったし、表にも裏にも地面の余裕があつて、庭もわりに広がった。そして自分の家を一軒所有するということが、何よりも母の望んでいることだった。

そういう風にして、公孫樹は父の「足の皮の養分」を吸つて、次第に大きくなつていった。

ところが、僕が高等学校の折、その公孫樹は隣家の火災のために、半焼になってしまった。

十月初めの夜中のことだった。「火事だよ、火事だよ、」という母の声に呼び覚されて、僕は驚いて飛び起きた。雨戸が一枚開かれていて、そこから真赤な明るみがさし込んでいた。その雨戸の開かれた真中に、くつきりと一人の男の立姿が浮出していた。それが父だった。

「慌てるな、大丈夫だから。」と父は怒鳴るように云った。「着物を着てしまっんだ。」

そこで僕達は皆着物を着た。そして父の指図で、母

や弟や妹や女中達は大事な物の荷造りにかかった。

「雨戸を明け放しちやいけない。電気をつけるんだ。俺が相図をするまで、荷物は運び出すな。」

何で雨戸を開け放すなど父が云ったのか、僕には分からない。がその時まで、電燈のことは全く忘れられていた。それくらい、戸の隙間や窓から赤々とした光がさし込んで、室の中はぼーと明るかった。

父は一通り皆に云いつけておいて、台所の方へ飛んでいった。そして、風呂桶に使うゴムのホースを水道の口にあてがって、その先を擱んで外に飛び出した。僕もその後について外に出た。ぱつと明るいものが眼

にぶつかつた。室の中から見た真赤な光ではなく、電光のような感じのする光で、それがあたりを一面に照らしていた。瞬間に、ひどい物音がした。隣家の軒にひらひらと焰が伝っていた。

父はホースの先を小さくしぼりながら、水を家の軒先にかけていた。然し、隣家の火はひらひらと蛇のようにならなかつた。火の粉も飛んでこなければ、熱くもなかつた。それに隣家との間には、かなりの空間と公孫樹の茂みとが狭つていて、その厚ぼったい葉の無数に重なり合つてるのが、綺麗に浮出して見えていた。

「お前は荷造りの手伝をして来い。まだ荷物を出し
ちやいけないぞ。」

父にそう云われて、僕はまた家の中に駆け込んだ。
家の中はごった返していた。大事な物も何も見分けが
つかなかつた。僕は皆と一緒に手当次第のものを持っ
て、あちこち駆け廻つた。

長い間のようにもあれば、短い間のようにもあつた。
すさまじい物音がしたので、皆あつと息をつめた。そ
こへ父がやって来た。

「家は大丈夫、騒がないでいい。」

それでも僕は気になって、台所の方へ飛んで行つた。

外に出てみると、隣家が半ば焼け落ちたところだった。濛々と渦巻く火の焰が立って、一丈ばかり上から先は、真黒な中に無数の火の粉となっていた。それがみな家と反対の向う側になびいていた。ぱらぱらと雨の降るような気配に気がつくとき、あたり一面に水だった。蒸汽ポンプが来て、隣家は四方から水を浴びていた。その余沫が頻に飛んで来るのを覚えると同時に、顔一杯に火のほてりを感じた。そしてあたり近所の騒ぎに、耳がごーつと遠鳴りするようだった。垣根も半ば壊されて、消防夫が駆け廻っていた。

僕はまた家の中にとって返して、父と同じように、

「大丈夫だ、大丈夫だ、」とくり返した。それから皆一緒になってまた裏口から覗きに來た。隣家の火勢は強かったが、危険の度はへつていた。皆震えながらぼんやりと立っていた。

火事は隣家を焼いただけで済んだ。そして僕の家は、垣根を壊されたくらいの損害だったが、公孫樹は隣家に近く聳え立っていたので、火気と火の粉とを受けて、憐れな姿になっていた。まだ青々としていた葉は、小さく焦げ縮れてしまつて、殊に隣家に面した方は、可なりの枝まで焼け枯れていた。そして幹の半面には、一間ばかりの長さに大きな傷を負っていた。とても助

かりそうになかった。

然し父は、なお公孫樹を見捨てなかつた。植木屋を呼び寄せて、すつかり手当をしてやった。

「この木のために家は救われたのだ。」と父は云つた。

実際その公孫樹の茂みがなかつたら、家はもつと直接に火氣を受けて、或は大事に至つたかも知れない。父ばかりでなく皆の者も、一種の感謝の念を覚えたのだつた。

そして公孫樹は、枝をすつかり切り落され、全部藁包みにされて、庭の隅に淋しくぼつりと立っていた。植木屋も助かるかどうか分らないと云っていた。でも

父は確信があるらしく、垣根の修繕の時にも、公孫樹に障らないようにと頼んでいた。

その父自身がまた、当時は誰も気付かなかつたが、頭をひどく柱にぶっつけて、それから一種の神経衰弱みたいになっていた。あれほど沈着だった父が、どうして頭を打っつけたのか、皆の者は不審に思ったし、父自身でも不思議だと云っていた。がそのために頭が悪くなって、冬の間中ぶらぶらしていた。

翌年の春、或る晩僕は読書に疲れて、室の窓からぼんやり外を眺めてみた。淡い月の光が、空に浮んでる雲の肌の流れで、静かな爽かな晩だった。で一寸庭に

でも出たくなつて、座敷の縁側の方へやってゆくと、その雨戸が一枚半分ばかり開いていた。不思議に思つて、そつと覗いて見ると、月の光がぼんやり落ちている庭の植込の向うの、藁包みの公孫樹の根本に、老人がしょんぼり立っている。それがよく見ると父だった。ひどく老けた姿で、背も少し前屈みになっていた。するうちに、父は着物の前をはだけた様子で、いきなり公孫樹の根本にしゃーと小便をひっかけ始めた。僕は呆氣あっけにとられたが、何だか見て悪いものを見たような気がして、こそこそ引返していった。

足の皮以外に一切肥料を与えない父が、而も土足に

踏まれるのは不快だという足の皮を埋めているところに、いくら自分のものだと云え、小便をひっかけてるのは理に合わないことだった。で僕はどうも腑に落ちかねて、それから注意してみると、父はやはり時々、人の目につかないように、公孫樹に小便をやつてのりだった。それがはつきり分ると、僕は理屈をぬきにして、一人で微笑が催されたのである。その小便の利目かどうか知らないが、五月の中頃に、不思議なことには、とても駄目だと見えていた公孫樹の枝から、可愛い若芽が萌え出してきた。

「おい来てごらん。どうだ、公孫樹の芽がふいたぞ。」

父は何度もそんなことをくり返して、僕達に新芽を見させた。新芽が大きくなり枝が伸び初めると、毎朝のように誰かをその根本に呼び寄せた。そして如何にも晴れ晴れとした顔をしていた。僕は小便のことを思つて一人で可笑しかった。余り可笑しいので、つい母へ告口してしまった。母は苦笑したが、次には小言をもち込んだ。

「いくら何だつて、汚いじゃありませんか。庭の中ですもの。」

それには父も閉口したらしかった。小便の効能で生き返つたのだと冗談を云いながらも、もう生き返つた

以上は……と小便を止めてしまったらしかった。足の皮ばかりの肥料となった。

その頃から、父は元のように元気になり、頭もよくなったとみえて、前に倍して働き初めた。そして二年後には、本当に家を買って取ってしまった。

その晩は一家中の喜びだった。僕達まで何だか嬉しかった。母は眼に涙をためていた。父はいつまでも酒を飲んでいた。

「少し古いけれど、いつでも建て直せるんだからね、……それにもう長年住み馴れたのだから、元々から自分の家のようなものだ。だから俺は、あの通り公孫樹

を大きくして根を張らせたのだ。」

そんなことを父は感慨深そうに云つて、やがては地所も買いたいなどと云つていた。

然し父のそういう元気には……というより、父の頭には、火事の時からひびがはいつていたのかも知れなかった。三年後に、脳溢血でふいに死んでしまったのである。遺言を聞くひまもなく、医者も間に合わないくらいだった。入浴をしてから、二階の書齋で暫く何かしているうちに、ふいにぶつ倒れたきり、もう再び意識を回復しなかった。

父の死後、僕は長男として家督を継いで、いろんな

ものを整理し初めた。そして、古い手文庫の抽出をかき廻してみると、その底に意外なものを見出した。

それは六つ折りの奉書紙で、折り畳んだ真中に公樹と二字認めてあり、表の上に、何年何月何日生としてみるに、よく調べてみると、僕達兄弟のと同じ形式の七夜の命名式の紙で、その生年月日は僕より一年三ヶ月前だった。

初め僕はただ意外な驚きだけを感じたが、やがて変な胸苦しさを覚えてきた。いろんなことが総合されて、一つの空想にまとまってきたのである。

僕はその奉書の紙を秘密にしまいこんで、いろいろ

事実の調べにかかった。然しはつきりしたことは何も分らなかつた。ただ断片的な事実を列挙すると、父は初め国から出て来て、祖母と二人で暮っていた。それから、国許の従妹と結婚した。その結婚は僕が生れる一年半ばかり前のことだつた。次に、その公樹という名前と、父が生前大事にしていた公孫樹、それ以外に何もなかつた。然しそれだけのことから、僕の頭に一つの小説が自然と出来上つていった。馬鹿げた空想かも知れないが、僕の場合に立つたら、誰でもそうより外に考えようはないだろうと思う。

父は祖母と二人で暮している時、或る女と関係した

……というより、恋をしたと云った方がいい。相手の女は、恐らく一時手伝いの女か女中か或は看護婦か、何でも家に親しく出入りした女に違いない。そう云えば、祖母がまだ生きてた頃、家にしばしばやって来て、祖母と話しこんでいった女がある。皆からお千代さんと呼ばれていた。祖母が亡くなってからはぱったり来なくなつた。その、顔の細長いどこかきさくな性質の、そして余り上品でないみなりの「お千代さん」が、相手の女だったかも知れない。その女が遂に妊娠して子を産んだ。ところが父の田舎の家は、古風な堅固しい家風だったので、前々から従妹と婚約がしてあつた。

そこで父はいろんな義理にからまって、従妹と結婚するようになった。そして女とその子供とをよそへやっ
てしまった。戸籍も初めからはいってはいなかった。
その子供が即ち公樹だ。結果は初めから分っていたの
で、父は女と共にセンチメンタルな感情に駆られて、
庭の隅に公孫樹なんかを植えて、心の中を誓い合った。
そしていつまでも、あんな風に公孫樹を大事にしてい
たに違いない。

人の頭は何て馬鹿げた想像を逞うするものだろう。
然し僕のその想像は、恐らく事実に近いものだと思う
のだ。

僕は自分の想像に固執していった。そしていつしか頭の中では、それが動かし難い事実となってしまった。とは云え誰からもしきり聞いたのではない。まさか母に尋ねるわけにもゆかないし、他に事実を知っているような者はいない。その上僕は、自分の異母兄たる公樹のことを考えていると、妙に憂鬱な気分にとざされていった。何かしら漠然と不安なのだ。事実を明るみに曝け出すよりは、一人で空想に耽つてる方が気安かった。ただ一度、「お千代さん」のことをそれとなく母に尋ねてみたが、昔祖母が世話になった人だというきりで、母は本当に何も知らないらしく、今は音信不

通で居所も分らないと、顔色一つ動かさずに答えたのだった。

そして僕は、他に探る手掛もない異母兄のことや、父のロマンスのことなどを、いろいろ想像しながら、父があのか孫樹に、足の皮とそれから一時小便とをやっていたことに思い及んで、何とも云えない暗い気分になり落ち込んでいった。

固よりそれは、父がしそうな事柄ではあった。どこか呑気で脱俗的な而も実利的な父の性格としては、由緒ある公孫樹に足の皮を与えるくらいは何でもないことで、場合によっては小便を与えるのも不思議ではな

かった。然し、若い頃のロマンスの唯一の名残として、感情的に深く拘泥していたに違いないあの公孫樹へ、他の肥料は一切与えないで足の皮ばかり与えていたということが、そして遂にあの古い家まで買ってしまったということが、僕の感情にはどうしてもぴたりとこなかった。それは何かしら重苦しい陰鬱な事柄だった。丁度蛇の死骸でも見るような気がする事柄だった。

僕はその憂鬱な気分にとざされて、長い間苦しんだ。父のロマンスを否定してかかろうとしたり、反抗的に凡てを母の前にぶちまけてみようとしたり、公孫樹を切倒そうかと考えたり、一切を忘れようとしたり、い

ろんな風に頭を向け変えてみたが、やはり気持は晴れ晴れとしなかった。先刻僕はあの大学の中で、砂利の煮られることを口では云っていたが、心ではアスファルトの方を見ていた。あの真黒な重いどんよりとしたやつが、ぐらぐら煮立ってるのを見てみると、当時の気持がふと蘇ってきたのだ。全く、釜の中に煮立ってるアスファルトを見るのと同じ気持だった。

所が不思議なものだ。学校から世の中に出て、厳めしいビルディングの中の狭苦しい室なんかには、毎日出勤するようになり、貧しい家庭生活にいじめつけられたり、社会の裏面を覗き見たりするようになると、父

の気持が——美しいロマンスの潜んでる公孫樹に、足の皮や小便なんかをやつて、伸びよ伸びよと心で叫んでいた父の気持が、ぴたりと胸に来るようになった。はつきり説明することは出来ないが、何だかこうどす黒い力強い気がするのだ。昔の日本風の建築と今の洋式の建築との違いだ。もう今では、香りのいい檜材なんかを鉋で削つてばかりはいられない。そういうことも必要だが、それ以下のことが——趣味的に以下のことが、更に必要なんだ。

そして僕は、これからあの公孫樹に小便をひっかけようかとさえ思う。父の意志を受け継いで、家敷

の地所をも買い取りたいとさえ思っている。とてもそんな金は及びもつかないが、それが出来たら愉快だろう。家屋なんかどうだっていい。父が家屋だけを買ったのは間違いだ。家屋は他人の所有でもいいから、地所だけは所有したい気がする。地面から公孫樹はつつ立ってるのだ。

勿論これは比喩的な話で、僕は実際そんなに所有慾はない。ただ僕には父の感情がびったり胸に来るようになった、というそれだけのことなんだ。

「僕にもその気持は分るよ。」と私は吉住が話し終っ

て暫くして云った。

「本当に分るのか。」と彼は不審そうに見返してきた。

「分るような気がするよ。」

「ふむ。」

彼は曖昧に口籠ったが、眼に涙をためていた。

「だが、」と私は敢て尋ねてみた、「その父の話というのは、本当のことなのか。作り話か、それとも君自身の……。」

「いや本当に父の話だ。……こんどその公孫樹を見に来給え。すばらしい勢で空に伸び上ってるよ。僕も大事にしている。」

底本…「豊島与志雄著作集 第二卷（小説Ⅱ）」未来社

1965（昭和40）年12月15日第1刷発行

初出…「改造」

1925（大正14）年5月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正…門田裕志、小林繁雄

2007年11月27日作成

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。